



1 4 0 0 0 粒
の
恋物語

twitter小説集1

遍織

傘

手の中で傘が震えた。とうとう、羽化するんだ。透明なビニールを脱ぎ捨てて、新しい羽でくるくる回りながら飛んでいく。雨粒を弾いて雲を突き抜け、見えなくなるまで。ポツカリと空いた青空から日が覗き、後には虹が残った。「新しいし傘、買わなきゃ……」

命の値段

命の商人が命のやり取りをしている。売った命の分だけ相手の命を買うが、命の値段は同じではないので注意がいる。うっかり値段の高いものを買ってしまうと、沢山の命を差し出さなければならない。ただし、買った命は手元には残らない。すべて壊してその場で買い取るからだ。バン！

裁判

「人類がネグレクトと虐待で訴えを起こしています。被告人は何か申し開きがありますか？」
「じゃあ、今すぐ絶滅しますか？ それで解決でしょ。大体、いつまで子供のつもりですか。生まれて何万年経ってると思います？ いい加減父離れしてください！」

信奉者

若き天才少女がその命を散らした時、十数人の信奉者が後を追い、未遂に終わった少女らも嘆きのあまり失踪した。だがあるとき、亡き少女に瓜二つの少女が現れる。多様な分野において、一人の人間に成せるとは思えないほどの功績を残した少女の墓には、名のない石碑が五つあるという。

DV

友達が顔に青あざを作っていた。化粧で隠していてもわかる。「DVなんでしょう？ 我慢しないで。警察に言うべきだよ」「大丈夫だから。本当に」「殴った後で泣いて謝ったんでしょう！許したらダメ」「違うの。殴られたから、私にも一発殴らせろって言ったの。そしたら許すって」

かぐや姫

「月に帰りたい」とかぐや姫は泣きました。ある男は月に土地を買いました。他の男はロケットを買いました。そしてもう一人は「虹の麓から天を渡って帰ろう」と言いました。二人は虹の麓を探して旅に出ました。そして死ぬまで旅を続けました。めでたしめでたし。

風巡る地下回廊

風巡る地下回廊で旅人は女と出会う。「出口が見つからない。それに恐ろしい声が絶え間なく聞こえて...ほら今も」言い掛けた言葉を飲み込んで、男は女を見た。その顔がみるみる青ざめる。悲鳴と半ば意味をなさない叫びが、また一つ回廊を巡る亡霊となり次の旅人へ警告を囁く。永遠に。

狂気1

Kは突拍子も無い行動、すなわち狂気がいかに人を惹きつけるかを滔々と語った。そして哀れな道化役に今度のパーティで何をすべきかを説明した。「みんな、お前に注目するぞ！」まさしく。Kに社会的に抹殺される犠牲者は三人目。僕らはただのフリが真実になる過程を観るのが好きだ。

リアルラブプラスごっこ

リアルラブプラスごっこと称して出会い系で出会った女と付き合い始めた。ルールは単純だ。やり取りはメールかチャット。TV電話はお互いアバター。絶対に会わないこと。わかったのは、ある面で現実の女はゲームよりも刺激的ということ。問題は、やたらと三次元化したがることだ。

コレクター博物館1

ここはコレクター博物館です。あなたの代わりにあなたのコレクションを管理します。管理料は
要りません。入場料を頂ければ結構です。たくさんのコレクターの集めたコレクションとともに
、あなたのコレクションをいつでも見に来てください。

コレクター博物館2

ここはコレクター博物館です。切手コレクター、鉱物コレクター、美少女コレクター（殺した少女を剥製にしている男です）、数字コレクター（財産の数字を増やしている男です）、背景コレクター（いろんな背景の写真を集める女です）。ご覧なさい、みな恍惚としているでしょう。

標本箱

叔父の秘密の標本箱には、透明な羽の生えた小さな女の子が虚ろな目で縫い止められていた。夏休みの最終日僕は標本箱を盗んだ。だが日の光の下で見たそれは棘を生やした小さな怪物だった。驚いて箱を落とし、中身は崩れ去った。叔父が集めたものがどちらだったのかは確認していない。

バレンタインに甘いプレゼント

「例え世界中を敵に回しても、私はロボの味方よ！」「ドウシマシタ、突然...」「今日はバレンタインといって好きな人にチョコを送る日なんですって。ロボはチョコを食べられないから、せめて甘さを感じて貰おうと思って。どう？」「何か間違ッテイル気ガシマスガ、嬉シイデス」

確固たる感情

「そんな急に言われても……好きかどうかなんてわかんないよっ」「確固たる感情なんて存在しないよ。境界で揺らぐその行き先を決めるのは、結局自分の意思でしかない。さあ、君の手で運命を切り開くんだ！」「……オブラートに包んでやってるの。あんたなんか確固として嫌いよ！」

ツンデレ

【6歳】

何泣いてるの？迷子な訳？ださっ。ほら、これで顔ふきなさいよ。手、だして。案内所つれてあげて。か、勘違いしないでよねっ。ママが迷子だから、探しに行くついでにつれてあげただけなんだからねっ。

【12歳】

まーた泣いてるの？いじめられた？男子の癖に情けないわねっ。いーい、あんなやつらと付き合っちゃダメ。わたしが遊んだげる。...かっ、勘違いしないでよねっ。明日の宿題が難しいから、あんたのノートを書きたいだけなんだからねっ。遊んだらノート進呈なさいよ。

【18歳】

あんたとの腐れ縁ももうこれでおしまいね。えっ、寂しいですって？あたしはせいせいするわ。もうあんたのお守りしなくていいんだからね。.....かっ、勘違いしないでよねっ。今度はあんたがあたしに尽くす番だって言ってんの！毎日電話するのよ。あんたの方からねっ。

【25歳】

え、来週お見合いする？今ドキ？断れないわけ...。しょ、しょうがないわねっ。わたしが予行練習してあげる。実践的に。今週末。今ママに電話するから黙って！え、見合いはしない？...結婚しよう...って。べ、べつにいいわよ。してあげても。ふん、手間が省けたわねっ//

【30歳】

ほら、よく見なさいよ。わたしに似て可愛い赤ちゃんでしょ。全然似てないけど、あんたの顔の中で唯一マシな鼻のパーツを奇跡的に受け継いでる。ほんと似なくてよかったわ！あんた赤ちゃんよりも顔くしゃくしゃよ。まったく、ブサイクねっ

【85歳】

か、勘違いしないでよねっ。わたしはあんたの苦しむ顔が見たいだけなんだからねっ。だから安心して逝きなさいよ。ほんと、あんたってバカで泣き虫でわたしがいなくやなんもできなくて、最期まで目が離せないやつねっ。だからずっとずっと、見てるからね。

狂気2

「頭蓋という拘束具、面の皮という見栄があればこそだ。一皮むけば皆狂いおるわ」その持論を身をもって証明した脳味噌は、電極に繋がれ計器を騒がせた。「お祖父様、もうお休みになって」不眠こそ狂気。それが私の持論だった。昼も夜も喚き続けるそれは眠り方を忘れている。

ヴァーチャル付箋

駅で付箋をつけた女を見た。タイムスタンプもエモーショナルサインもない白紙の付箋。だが、確かにそれは私の付箋だった。ログを遡れば簡単にわかるであろう付箋の発端を、私は心の内から掘り返そうとした。憧れ、思い出、記されなかった感情。空白がそれを望んでいるように思えた。

ヴァーチャル恋人

男の人生と情熱のすべてをかけて制作したヴァーチャル恋人は、公開30分で複製され何千何万の海賊版が出回り、ネギを持たされたり、卑猥なことをさせられたりしたが、男は嘆かなかった。男の開発した強固なプログラムにより、コピーも含め全ての彼女は正確に彼だけを愛したからだ。

クローン

「今日は何があった？教えてくれ」自分と同じ顔の男に有線で接続しようと手を伸ばす。「嫌だ、これは俺の経験だ。お前と共有はできない」「お前は俺だろ」クローンは首を振って家を飛び出した。以来、家出した猫の帰りを待つように男を待ってる。失くした経験のことを思いながら。

タイムマシン 1

「私と出会ったがために、あの男は正義に目覚め、私の野望を阻むのだ。タイムマシンであの時の出会いを阻止するのだ！」「はっ！」……「総帥、任務完了しま…アレ？ レッド、何故ここに！？」「悪の総帥といえど、心の底からの悪ではないと私は信じている。タイムマシンで過去に戻りあの男の善の心を目覚めさせるんだ！」

タイムマシン2

タイムマシンを起動せよ！」「博士、急になぜ？ 発明は封印するはずでは...」「訳は聞くな。時間を20分戻す」「なぜ20分...いや、何か臭う...」「321、起動！」ピカッ。20分後「タイムマシンを起動せよ」「博士、何か臭う...」「30分前へ...今度こそ間に合わせてみせる！」

シュミュレーション

核爆弾が地上をなめつくしたところで、スイッチを押した国の大統領がヘッドセットをとった。

「シュミュレーションの通り、我が国が勝利しましたので、領土と戦後賠償の話をしませう」
「あのお、この戦争なかったことにするわけには...」
「だから、しないでやったのだというのだ！」

テレポート

「テレポート装置を発明した！ 細胞一つくらいを転送可能」「何の役に立ちますか」「...不妊治療とか？」「悪用されませんか？ 仮に一日一回実行したとして、卵子に辿り着く確率は一万分の一、つまり28年もあれば可愛いあの子を処女懐妊させることも...」「もう処女じゃない」

親バカ

「ついにAIが完成した！ ツイッターを通して人々と触れ合うことによって、この子はもっと進化するぞ！」「こいつも、こいつも、ブロック！ ええい、どいつもこいつも、この子の学習に相応しい人間はいない！」二日後「このアカウント、AIなんだったって？」「まあ鍵掛ってるけど」

シュレッダーマン

いらない人間をシュレッダーするとき、血と汗と涙と糞尿とそれから何かきらきらしたものが飛び散って、死んだら人は軽くなるというけれど、こんな明らかなものになぜみんな気づかないのかと、シュレッダーマンはずっとずっと眺めている。墓標の代わりに。

携帯人間

「田中！学校に携帯人間連れてきちゃダメだって言ったろ。先生の若い頃は、携帯電話とかで顔も知らない世界中の人間と繋がってたぞ。自分の殻に閉じ籠もるな。外へ出ろ」「ありえない」「知らない人と話すなんて」「キモい」教師が若い頃もクラスの友達と会話はしていなかった。

コピー人間

そうきみは代替可能かもしれない。でも本当にそれでいいと思ってる？ 壊れたら、失くしたら、誰が責任をとってくれるの。代替品をすぐに用意できないモノに誰も用はないよ。さあ、僕にはさんで。そっくりそのまま——え、いや？ きみは一体、いくらで売りつけるつもりなの？

乗り物

「体の返却期限が切れた」と、血を吐いた友人をショップまで背負うはめになった。「切れるとこうなるなんて知らなかったな。事前に交換してたから」「交換費用高いよ。しばらく飯抜きだ」「乗り物の飯なんて必要最低限でいいだろ」「だって血色がいい方がカッコいいじゃないか」

常若の国

労働力の減少とともに、人工子宮による生育技術が発達。人は約5歳まで人工子宮で過ごし、眠りながらにして基本的な学習を済ませた。世界に生まれ落ちたときから大人として扱われ、子供時代の消失が問題視された。世界の平均寿命は25歳であった。

どくやく

よろこんでください。私があなただのさつがいを決意したのは25のとき。あれから50年。自分を実験台にしてようやくどくやくが完成しました。あなたはもう82さい。じわじわしんでいくきょうふを味わってください。私はもう10さい。見届けられないのがざんねんです。82年後にしね。

夢

「夢の中で私は知らない場所にて、知らない人と知らない話をし、知らないことをしている。私は恐ろしい。幸せで満ち足りた彼女は一体誰なのか...」あなたは記憶喪失なのです。今は自分が空虚な金属の駆動体に思えるかもしれない。だがいずれわかります。あれが本当の人生なのです...

口癖

「一度に一語ずつ語るんだ、いいか」それが親父の口癖だった。だが、やつらがすべてを破壊してしまった。美しい音律も言葉の連なりも、時間の流れすら。効率的な情報伝達法にみな飛び付いた。人の声帯にそぐわない、あの——「一度に一語ずつだ……」ひとり男は呟き、すすり泣いた。

雨

「待て！」シェルターから突き出した手を酸の雨が焼いた。土砂降りの雨の中で裸の女が躍り狂う。やがてそれは霞の向こうに消えた。今でも時折、外の世界から誘うような笑い声が聞こえることがある。喉を焼かれ身体を溶かされ、激痛に躍り狂いながら、どこまで走れるのかを考えている。

「浜辺」で登場人物が「崩れ落ちる」、「包帯」という単語を使った怪談

浜辺を散歩していると、体育座りするミイラ男に出会った。「中身がなくて哀しいんですの？」「いや、透明人間ですから自分。中身ありますから」「中身、詰めて差し上げますか？」「だからやめ...がぶごぶっ！」崩れ落ちた男の包帯の下は砂まみれになり、心なしか輪郭が見えていた。<http://shindanmaker.com/94450>

玉虫色の楽園と千年生きた幼馴染の物語

「居心地のよい世界には、居心地のよい軀が必要だ」彼は細長い身体を屈めて僕を振り向いた。
「それで、そんな姿になっちゃったのかい？」——千年後に会おう。僕は眠り、彼は玉虫色の楽園に住み続けた。身体を組み換えながら。身震いして僕は世界を眺めた。この世界は僕には少し寒すぎるようだ。 <http://www.petitnoir.net/odaidepon/>

題材[見慣れない,祭,なりすます,また会える]ファンタジー風

闇と共に炎を囲む輪に狐面の若者が加わった。祭り囃子に厚みが増し、甘い酒樽が次々運び込まれる。隣村の若衆かえ？ 疑問は乱ちき騒ぎの中にかき消され、若い男女は藪に消えた。禁忌もなく人と交わるものもいた。故郷の山を焼いた炎を見つめ続けたものたちは、朝にこの地を去った。 <http://shindanmaker.com/9025>

不変の出世頭と将来性のある王子の物語

「物語の王子は決して失敗しないけれども、決して王にもなれない」童話の中の王子に話しかけたら、驚いたことに相手が返事をした。「きみには可能性があるけれども、確かなものは何もない」「結末を変えてあげようか？」描かれなかった続きを。だが、王子は首を振った。「それじゃあ、王様になったとき、きみの物語を書いて」

<http://www.petitnoir.net/odaidepon/>

「呪術」「属性」「作家」の3つの言葉

「俺はもう術は使わないって決めたんだ」「どんなに嘆いても、生まれもった属性は変えられないわ。この術は、あなたにしか使えない」人形作家は歪んだ己の作品を差し出した。「さあ私の人形に命を込めるのよ。属性はもちろん、ヤンデレで」「いやだ、俺はツンデレが好きなんだー！

おまけ

呪術師は疑似生命をモノに吹き込むことができる。疑似生命は宿ったものが破壊されたり、術が切れると精神崩壊するが、その長さは術者の力に左右される。また、術の構成に含まれない疑似生命の性格特性や感情の出所は謎とされ、一般に術者由来のものとされる。その特性を属性と呼ぶ。

彼は自分の疑似生命の性格が歪んでいるのは、術の修練が足りないためと信じ、ツンデレ属性習得のために修行を重ねたが、術の強度が増しても運用に支障のない範囲で疑似生命の性格は歪んだままだったため、新たな属性として認定された。彼の客はマニアックな人間が多い。

<http://shindanmaker.com/5279>

エア花見

何見てるんですか。「花見ですよ。薄桃色の花びらが雲みたいに空一面を覆って、風が吹くと雪のようにひらひらと舞うんです。綺麗ですよ」でも、何も無いじゃないですか。枯れ木だけだ。「想像してください」眼を閉じる。うん、綺麗だ……。目を開くと、そこには誰もいなかった。

地縛霊

「この路線今日で廃線なんだ」最後の日、僕は毎日同じ車両に乗るあの子に声をかけた。「これから、どうするの」「あの日、私は終点到りつけなかった」「もう、降りよう」僕は手を差し出した。成仏したはずの地縛霊は今僕の車の後部座席にいる。「私の目的地、反対側の終点だった」

無口な人がいた。自己主張せず、理不尽な話にも文句ひとつ言わなかった。何しても平気だと周囲から侮られていた。その人がこの世を去った後、ひっそりと運営されていたブログの存在を知った。そこには語られなかった言葉があった。あの人の声で聞きたかったと思うと涙が出てきた。

「大変なんだ、MMOのやり過ぎで耳が聞こえなくなった」「え、ちゃんと通じてるじゃん」「いや、お前の声は吹出しになっている」「まさか……」「ホントなんだ！！信じてくれ」「……今、何か言いかけた？」「なるほど、確かにホントらしいな……」

ガチャガチャ。「すごい量のゴミですね。なんですか？」括弧です。「え？中身はどうしたんですか？」地に埋めました。

避難警報

緊急流星速報です。〇〇県北部に向かって落下中の流星を捕捉しました。レーザーにより迎撃しますが、念のため落下予測地域より半径20km圏内の方は至急避難してください。20kmから30kmの方は丈夫な建物内に避難し、窓から離れてください。繰り返します...

栃木

「栃木って、どこにあるの？」 「福島の下ですよ」 「ああ～、なんとなくわかったあ」

「都庁を破壊した着ぐるみ怪獣が、スカイツリーに向かって移動中です。中継の鈴木さん」「はいこちら、東京上空のヘリです」「中の人情報はなにかありますか?」「いえ、こちらからはよくわかりません」「我欲を洗い流せなどという言葉は聞こえますか?」【TVでまた失言】

徴役

男が箱に手を入れて札を引き抜く。「赤札だ！」広がる歓声。俯く男に駆け寄る家族。隣で白札を引いた男が見かけだけ悔しがっている。「貴殿はこれより半年の原発冷却役に就かれる。被爆量が限界に至ればもっと早く終わるであろう。皆で我が国の英雄を送り出そうではないか。敬礼！」

自粛

「何してるんですか？」

ニート「活動を自粛しています」

RPG

こうそくぞうしょくろ もんじゅ が あらわれた！

「グハハ、こいつは モンスターを ぞうしょく ばいよう するだけでなく、じぶんで こうげき も できるのじゃ」

「クレーンが じゃくてんだ！ みんな かかれ！」

「ぐあー やられたー」

「ゆうしゃ！ まだ もんじゅ は ていし していない」

「ならば そっとしておこう。さあ、つぎは ラスダンだ！」

つづく

四コマ

「ねえきみ、この四コマ漫画、四コマ目がないんだけど」「ありますよお。落ちてるんです」「どこお?」「ほらそこ」「ええ?」「そこそこ」「どこお?」「あそこですよあそこおー」「見つからないなあ」「ちゃんと探してくださいよ」「.....」「.....」「オチてないよ!書き直し!」

恋人同士

若い恋人同士が睦み合う。女が男の耳元で囁く。「ねえ、言葉を発したら死んでしまう生き物がいたとして、一生に一度、一言だけしか、誰かに言葉を伝えられないとしたら、なんて言う？」男はしばらく考え込んでいたが、やがて言った。「しゃべったら、死ぬぞ!？」

父の形見

「もし、三日経っても俺が戻らなかったら、そのときは……」「わかってる。この父の形見のS&W M19コンバット・マグナムで——」振り返った男と、視線が絡み合う。「あなたのHDDを破壊する！ ……ところで、何が入っているの？」「きいてくれるな」そして、男は去った。

暴力

「唸る拳がお前の右頬を打つ！ 仰け反ったお前の肩を掴み、鳩尾に膝蹴りを叩き込む！ 倒れ込んだお前を爪先で蹴りあげる！ 何度も何度も何度も！ 血へドを吐いたら、髪を掴みあげて顔面を地面ですり下ろす！ ……どうだ、おれの言葉の暴力は」「胸が痛いです」

タイムマシン・番外編

「1999年に世界が本当に滅びるか確かめるために、2011年にタイムスリップしましょう」「地震・津波・放射能！？ 時代を間違えた？」「コンビニにいけば今が世紀末かどうかわかるわ」「新世紀リーダー伝タケシが連載されていれば新世紀だ！」ババッ「こ、これは」「ト、トリコ！？」

ドワーフの伝説

お伽噺のドワーフのような種族が、かつてこの地に存在していたらしい。彼らは黄色の肌を持ち、背が低く手先が器用で、たくさんの複雑に組み組んだダンジョンを地下に形成し、そこで生活していた。「新しいダンジョンが見つかった!」「こ、これが.....シンジユクエキ!」

タイムマシン3

「2030年から2011年にタイムスリップしたぜ！」 「おい、あの広告を見ろ」 「アンドロイドが、すでに実用化されている……!？」

ソードマスターパロ

月「グアア」

火「くくく...やつは四天曜の中でも最弱」

(ズサ)

火水木「グアア」

金「よく来たなヤマト。お前は私を倒すのにタウリンが必要だと思っているようだが別になくても倒せる」

「このオレにやり残しの仕事があったような気がしたが別にそんなことはなかったぜ」

俺たちの戦いはこれからだ！

怪奇！ 急増する腰パン族の真実

「ホームが混んで腰パンの人にぶつかっちゃったんです。ほんの軽くなんですけど、あの人足短いから線路に落ちちゃって...下半身はぐちゃぐちゃになってました。でも上半身は“歩いて”排水溝に入ってっただんです。他にも沢山見てた人いると思いますよ」

ツイノベの陰謀

「ここだけの話だが、一部のツイノベ作家はtwitterの中の人に金を払って140字以上書けるようにして貰ってるらしい」「マジすか!?!」「これを見ろ! どう見ても140字以上の内容だ」「確かに、カンウントしても140字以下にしかみえません」「だろ? 陰謀だろ!」

これはフィクションです

「きみ、#twnovel とつければ、何を書いてもいいと思っているだろ」「そんなことないよ」「次からはこれもつけたまえ」※この物語はフィクションです。実在の人物、団体及び事件とは一切関係ありません。「残り92文字しかないよ!」

14000粒の変物語

<http://p.booklog.jp/book/26746>

著者：遍織

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/urano/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26746>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26746>